

# これからの時代に生きる教員を育てる教員研修の在り方に関する研究

千葉県総合教育センター  
カリキュラム開発部研究開発担当  
研究指導主事 香取 伸嘉

## 1 主題設定の理由

新学習指導要領においては、各教科等の指導に当たって、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。そのため、各学校の課題に応じた改善の手立てを工夫し、学校全体で全教職員の共通理解のもと取り組む校内研究の充実が不可欠である。また、急速に教職員の世代交代が進むとともに、多忙化解消に向けた学校の業務改善が求められている。このような状況を踏まえ、各学校で、限られた時間の中で教職員が協働して取り組む校内研究を実践していく必要がある。

また、県では、「千葉県・千葉市教員等育成指標」及びこの指標に基づいた「千葉県教職員研修体系」を策定した。本センターでは、子供と向き合う時間を確保しつつ、これからの時代に求められる資質・能力を育成する実践的指導力や自ら学び続けチーム学校を支える責任感と協調性等を高めることができるように、研修の質的改善をさらに進めていく必要がある。

以上のことから、校内研究の進め方と研修の在り方に焦点を当て、これからの時代に生きる教員を育てる教員研修の在り方の一端について、明らかにしていきたいと考え、本主題を設定した。

## 2 研究の目的

様々な教育課題への対応や教員の資質能力の向上の必要性がますます高まる中、これからの時代に対応した教員研修の在り方を明らかにする。

## 3 研究の内容

- (1) 校内研究の進め方（校内研究モデルプランの作成）
- (2) 新しい時代に対応した研修（新しい千葉県教職員研修体系に基づいた研修）の在り方
  - ・新学習指導要領や今日的課題に即した研修
  - ・eラーニングを活用した研修

## 4 研究計画

| 年度             | 校内研究                                             | 新しい時代に対応した研修                                         |
|----------------|--------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 令和元年度<br>（1年次） | ○実態把握<br>○先進校への視察、文献調査<br>○校内研究モデルプランの試案の作成      | ○eラーニングの実態把握<br>○eラーニングを使った効果的な研修の方策の検討<br>○研修の内容の改善 |
| 令和2年度<br>（2年次） | ○実証校による実践及び検証<br>○校内研究モデルプランの改善<br>○ガイドブックの作成・発行 | ○研修事業の実践及び検証<br>○次年度に向けての改善策の検討                      |

## 5 研究の概要

### (1) 校内研究について

#### ア 校内研究に関する実態

千葉県総合教育センターで実施された「新任研究主任研修」（令和元年6月7日）の受講生 110 名（小学校籍 74 名、中学校籍 36 名）にアンケートを実施した。

#### 【アンケート結果の主な項目】

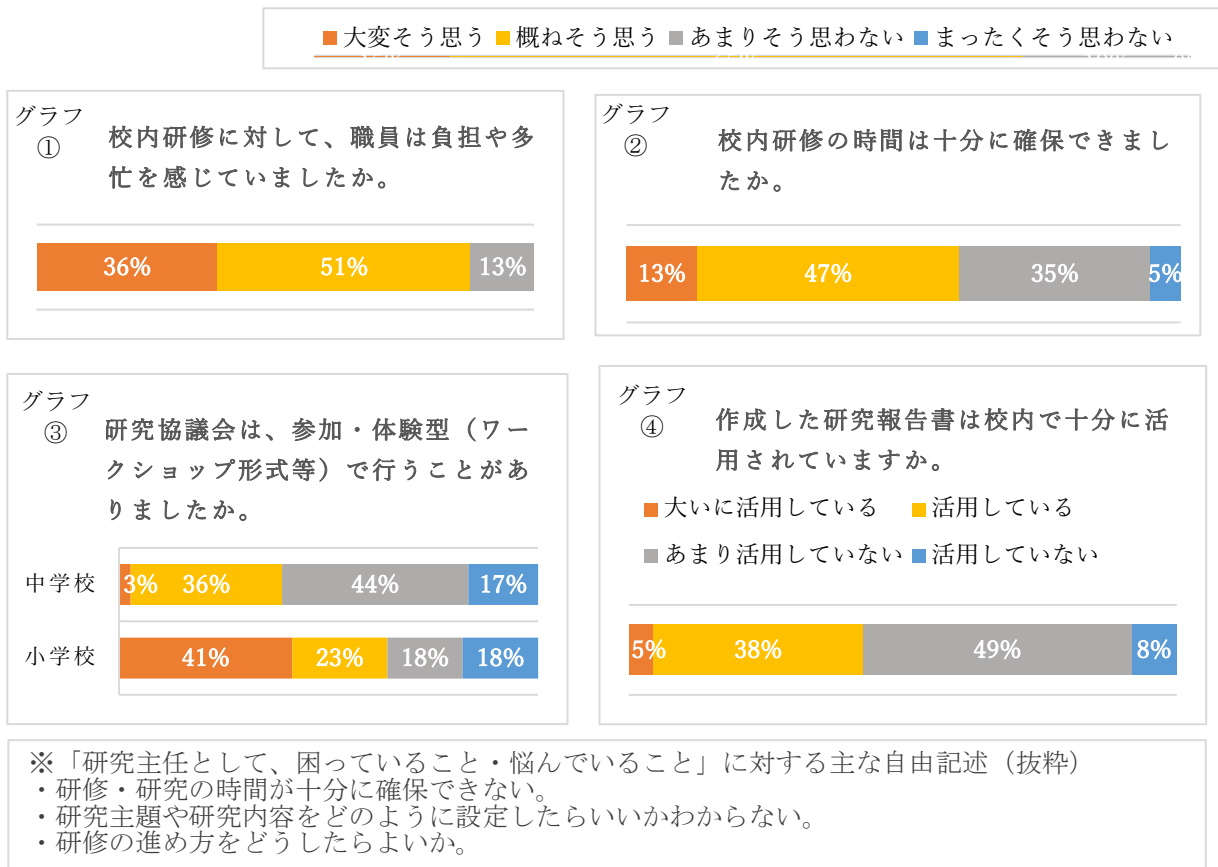


図1 校内研究に関するアンケートの結果

#### 【考察】

グラフ①から職員の 87%が校内研修に対して、負担や多忙を感じている。グラフ②から研究主任の 40%が校内研修の時間が十分に確保できていないと答えている。また、自由記述欄の回答にも、「研修・研究の時間が十分に確保できない。」と答える研究主任が多い。校内研究を限られた時間の中で効率的・効果的にすすめていくことが重要になっている。

グラフ③から研究協議会の持ち方については、参加・体験型（ワークショップ形式等）の研究協議会は、約半数の学校でしか実施されておらず、特に中学校での導入は 40%以下である。参加・体験型で研究協議を行うことにより、全教職員が意見を出し合い、話し合いが充実することで参加者の研修意欲の高まりが期待できる。参加・体験型の研究協議を多くの学校に広めていく必要がある。

また、グラフ④から、年度末に研究報告書が作成されているが、次年度に十分活用されていない実態が明らかになった。研究の成果が次年度以降の授業改善に反映されなければ、研究を行う意義も感じられずに負担感が増してくるのではないかと危惧される。各学校で行われる実践が、次年度に成果として実感できる研究にしていかなければならない。次年度以降に活用できるような研究のまとめ方について検

討していく必要がある。

## イ 校内研究モデルプランについて

### (ア) 校内研究のモデルプランの方向性

実態調査の自由記述から、研究主任が研究主題の設定の仕方や研究の進め方で悩んでいる姿もわかってきた。世代交代が進み、教職経験の少ない研究主任が増えてきている中で、具体的な実践方法を含めてモデルプランにして、研究主任を支援していく。

### (イ) 校内研究の進め方

新学習指導要領では、児童生徒の資質・能力を育成するために、学校として育成を目指す資質・能力を明確にした教育目標を設定し、教科等横断的な視点でその教育目標にアプローチしていくことが求められている。校内研究は、その学校の課題を明確にし、その解決のために組織的に取り組む活動であることを踏まえ、全教職員で計画的に取り組んでいくことが重要である。研究の計画・共通理解→研究の実践→研究のまとめ→次年度に向けてというPDCAサイクルの形態を取り入れることによって、研究を継続的に行うことができ、研究主題・研究実践等をより深く追究していくことができる。

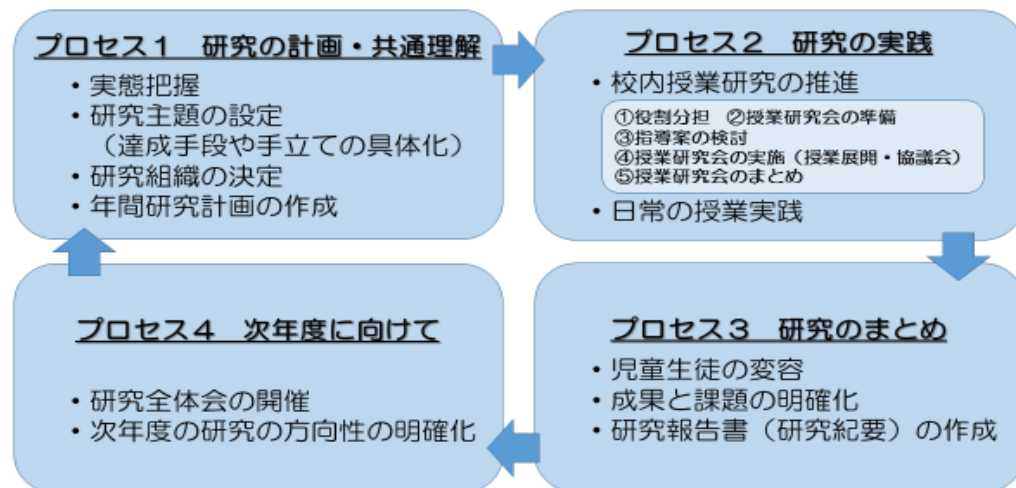


図2 校内研究の年間サイクル

### プロセス1 研究の計画・共通理解

- ・学校の実態把握をする。【取組例①】
- ・前年度にまとめた研究の方向性及び学校の実態から研究主題を設定する。【取組例②】
- ・達成手段や手立てを設定する。
- ・研究組織の役割分担をはっきりさせ、校種や学校の規模などの実態に応じた研究組織をつくる。
- ・1年間の見通しをもとに、実効的な年間研究計画をつくる。

#### 実態把握をする【取組例①】

研究主題を設定するために、学校の実態把握を行うことが必要になる。特に、児童生徒の実態については、客観的データに基づいて具体的に分析することが大切であり、変容を見る上でも重要である。

#### 【方法・手立ての実際】

- 全国学力・学習状況調査の結果をもとに児童生徒の実態を分析する。



図3 クロス集計シート

○本センターで作成した「分析ツール」を活用し、全国学力・学習状況調査の結果を分析し、課題の把握をする。その中で「クロス集計ツール」を使い、児童生徒の生活習慣や学習習慣との相関関係を把握することや「誤答分析ツール」を使い、教科に関する調査で課題が見られた項目や設問について、つまづきを分析することも大切である。

### 研究主題の決定をする【取組例②】

研究主題は研究の方向性を示すものであり、全教職員の共通理解が得られるようにすることが大切である。

#### 【方法・手立ての実際】

- 全教職員で課題を共有し、全職員の意見を反映させるために、ワークショップ形式等の参加・体験型研修を行う。
- 研究推進の方向性を明らかにし、研究のゴールがわかるような到達点を明確にした研究目標を設定し、具体的な手立てや工夫を共有する。

## プロセス2 研究の実践

- ・研究主題にせまるための達成手段をもとに、授業で検証していく。
- ・校内授業研究会の役割分担をし、準備をする。
- ・研究主題と関連付けながら、授業者の意図が参観者に伝わるように指導案を作成する。
- ・授業参観では、参観の視点を明確にし、研究協議会では、全教職員が意見を出し合うことができるようにする。【取組例③、取組例④】
- ・研究協議会を通して確認された成果や課題を、全教職員で共有する。【取組例⑤】
- ・日常の実践授業では、負担感を減らし、時間や方法・内容を精選して取り組む。【取組例⑥】

### 授業研究会の準備をする【取組例③】

授業参観し、研究協議会を開いた際にどのような観点で話し合いをするかが明確でないと、話し合いが深まらないことが多い。事前に授業参観者に目的や授業参観の視点を知らせ、研究協議会の際の話し合いの観点を共有しておくことは大切である。

#### 【方法・手立ての実際】

- 研究主題や仮説に基づき、授業で検証すべき視点を決定する。
- 各校の実態に応じた「授業評価シート」を作成し、数値やコメントによる評価を行う。
- 「授業評価シート」をもとに、協議会での意見交換を行う。

#### 第2回 校内授業研究会 授業評価シート（ ）

◇「主体的・対話的で深い学び」を視点とする授業作りについて、以下の点から振り返り、評価欄のあてはまる数字に○をつけてください。また、評価の理由も記入してください。  
(4：十分達成できた 3：少し達成できた 2：少し達成できなかった 1：ほとんど達成できなかった)

| 評価項目                                                                                        | 評価      | 評価の理由 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|---------|-------|
| 1 【主体的な学び】<br>どの児童も課題意識を持ち、問題解決・課題解決を目指した学習活動を展開していた。<br>児童が学習活動に興味・関心及び見通しをもって粘り強く取り組んでいた。 | 4 3 2 1 |       |

図4 授業評価シートの例

### 協議会の形態を工夫する【取組例④】

参加者同士が立場のちがいを超えて、関わり合いながら協議を進めることで、全教職員が主体的に取り組むことができる。

#### 【方法・手立ての実際】

- グループ協議の編成を行う。年齢、男女、教科などバランスを考慮し、全教職

員の主体的な参加を呼び掛ける。

- 進行役として、ファシリテーターの活躍を求める。  
ファシリテーターは、協議の中心的な立場でプロセスを管理し、チームワークを引き出し、そのグループの成果が最大になるように支援する。
- 主体的な参加や協議の深化を図るために、「拡大指導案」「マトリックス法」「概念化シート」等の思考ツールを目的に応じて活用する。

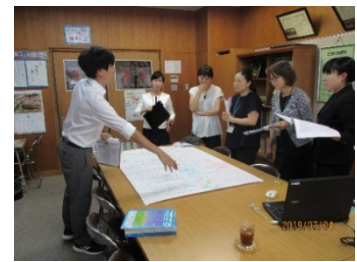


図5 研究協議会の様子

「拡大指導案」

「マトリックス法」

「概念化シート」

|            | 視点<br>① | 視点<br>② | 視点<br>③ |
|------------|---------|---------|---------|
| 良かった点      |         |         |         |
| 改善点        |         |         |         |
| 疑問点        |         |         |         |
| 改善策<br>手だて |         |         |         |

○視点に応じて付箋の色を変えることで視覚的に分析することができ、本時中心の分析には向いていないが、単元全体の分析には向いている。

○協議の視点が焦点化される。  
○研究主題や仮説と結びつけやすい。  
▲授業を参観前に、必ず視点を共有しておく必要がある。

○協議の視点を構造化し、整理のできる場所に整理することができ、成果や課題が捉えやすくなる。  
▲改善点を共有する必要がある。

図6 研究協議の方法

### 授業研究会のまとめを行う【取組例⑤】

研究協議会を通して確認された成果や課題は、今後の指導改善の手がかりになるので、全職員で共有する場を設定する必要がある。

#### 【方法・手立ての実際】

- 研究報告会を行う。
  - ・研究協議会を分科会形式で行った場合は、全体会を設定したり、職員打合せや職員会議等の時間を活用したりして、報告を行う。
  - ・研究協議会で作成した成果物や使用した資料やワークシートは、そのまま職員室等の掲示コーナー（研修コーナー）等に掲示して共有する。
- 「研究だより」を発行し、共通理解を図る。
- 研究協議会など改まった場所だけでなく、普段の会話の中で授業改善が話題になるような雰囲気づくりを心がける。

### 日常の授業実践に取り入れる【取組例⑥】

研究の達成手段の有効性を検証していく上では、日常の授業においても、研究組織を生かしながら、個人やグループ単位で取り組んでいくことが大切である。

#### 【方法・手立ての実際】

- 講師を招聘しての校内授業研究会の他に、ノート指導案を使って日常的に授業研究会を行う。ティームティーチング形式で行う際には共通理解した上で、授業を進めることができる。
- 協議会の時間が十分確保できない場合がある。協議する内容や授業場面をしばらく込んでおくことで、短時間で（15分から20分程度）で効率的に行うこと



ができる。なお、予め終了時刻を決めておいたり、スタンディング会議にする等形態を工夫したりすることが大切である。図8は、研究協議会の時に使用する「授業振り返りシート」である。児童生徒の変容を掴み、実践を蓄積することができる。

- お互いの授業参観の時間の確保が難しい場合は、「ビデオを活用した授業参観」や研究の手立てに迫る活動の時間だけ参観する「ポイント授業参観」を行う。

**児童のノートを中心に…**

【見出す】児童の実態や既習事項などから学びの課題を想起する

【調べる】児童がどのような考えをもつかを想起し、考え得る限り記す

【検証】本時で学んだことを児童が検証するための問題を作成する

【深める】児童にどのように説明してほしいか、本時で身に付けたい力は何かを記す

【まとめあげる】本時の学びにおいて大切な点を児童の視点に立って文章化する

【ふりかえり】本時の学びから理想とする児童のリフレクションを文章化する

図7 ノート指導案

**授業の振り返りシート**

單元名: \_\_\_\_\_ 単元: \_\_\_\_\_ 担当: \_\_\_\_\_

目標: \_\_\_\_\_

※改善がめざす観点のみ記入し、改善を具体的に記述する。

| 項目     | 観点 | 評価 | 改善 | 児童生徒の変容・キャリア発達の様子 |
|--------|----|----|----|-------------------|
| 教材・教具  | ✓  | ✓  |    |                   |
| 場づくり   | ✓  | ✓  |    |                   |
| 教師の働き方 | ✓  | ✓  |    |                   |
| 学習成果   | ✓  | ✓  |    |                   |
| 教材・教具  | ✓  | ✓  |    |                   |
| 場づくり   | ✓  | ✓  |    |                   |
| 教師の働き方 | ✓  | ✓  |    |                   |
| 学習成果   | ✓  | ✓  |    |                   |
| 教材・教具  | ✓  | ✓  |    |                   |

図8 授業の振り返りシート

### プロセス3 研究のまとめ

- ・授業での実践や児童生徒の変容、学校評価（自己評価、授業アンケート）等をもとに、研究の成果と課題をまとめ、研究について振り返る。
- ・成果と課題を明確にし、次年度以降に活用できるように、学校や教職員の実態に応じた研究のまとめ（報告書）を作成する。

### プロセス4 次年度に向けて

- ・研究全体会を開催し、全教職員で共通理解を図る場を設定する。研究の成果と課題や学校の実態に基づいて、次年度の研究の方向性を決める。日常の授業実践で活用していくことと、次年度の研究を通して追究していくことを整理する。

## (2) 新しい時代に対応した研修(新しい千葉県教職員研修体系に基づいた研修)の在り方 ア 新学習指導要領や今日的課題に即した研修

新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善により、児童生徒の資質・能力の育成が強く求められている。また、「プログラミング教育」や「主権者教育」等が加わり、これらに対応した研修が必要になっている。

本センターでは、学習指導要領の改訂に対応して、研修の新規開設及び内容の改善を進めている。その一例として、次年度の中堅教諭等資質向上研修Ⅰの研修全体像(図9)を示す。

新学習指導要領では、「どのように学ぶか」といった学習過程を重視し、生きる力を育むことが重要になっている。また、授業では、教師主導の学習形態から子供主体の授業へと転換する等、学習過程の質的改善が必要である。そのため、中堅教諭等資質向上研修Ⅰでは、「主体的・対話的で深い学び」についての講話後、授業力向上のために必要な「問題発見力」「カリキュラムマネジメント力」「プロジェクトマネジメント力」「コーチング力」「コーディネート力」を意識しながら、自ら課題を発見し、課題を解決するための計画を設定する。その計画を基に、校内研修及び校外研修を行いながら、教師が自己の課題を解決していく。最後に研修の成果と課題を把握し、今後の自己研修への展望をもてるような研修の流れになっている。つまり、新しい時代に対応した授業力や学校組織の中で自己の課題解決に向けて追究し

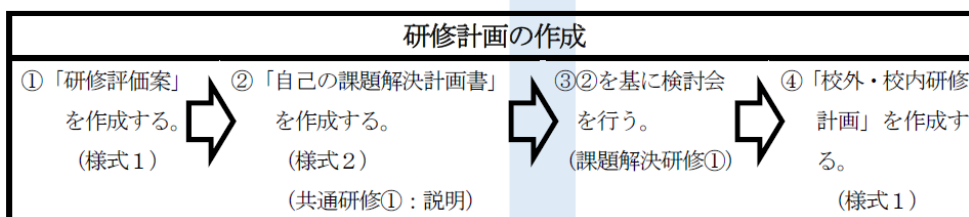
ていく力を実践的に育成する研修に内容を改善している。

なお、効率的に研修を進める観点から、eラーニングを取り入れる。eラーニングを受講することによって身に付いた基礎的・基本的な知識を基に、自校で授業実践をすることで理解を深めていく。

## 研修全体像

### 「『主体的・対話的で深い学び』の実践」

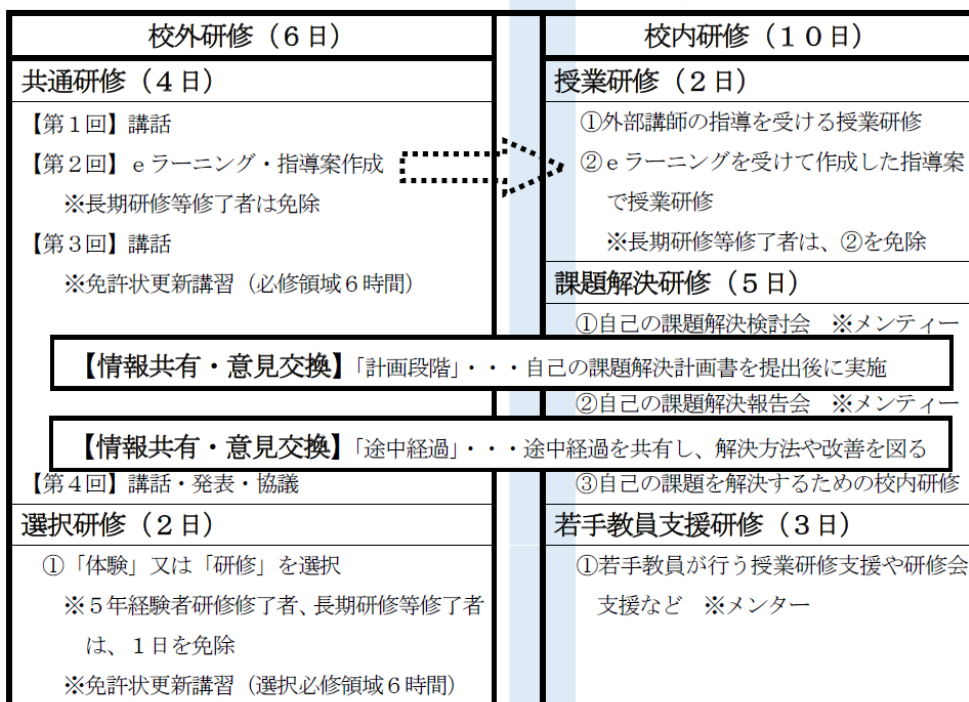
## Plan(計画)



授業力  
の向上

適切な課題  
が発見できる  
問題発見  
力

## Do(実行)



単元構成を  
考えること  
ができるカリ  
キュラム  
マネジメント力

発見・解決・発信の  
サイクルの  
授業実践が  
できるプロジェクト  
マネジメント力

児童の活動  
支援ができる  
コーチング力

外部機関との  
協働が図れる  
コーディネート力

## Check(評価) Action(改善)

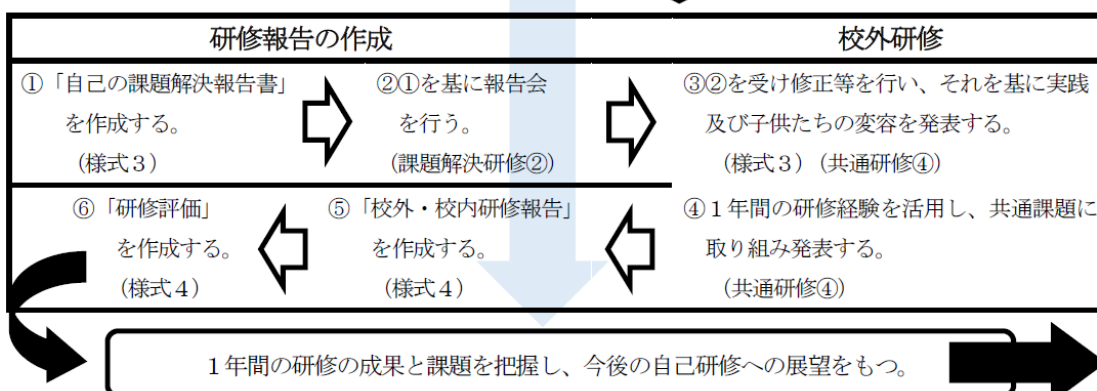


図9 「令和2年度中堅教諭等資質向上研修Ⅰ」の研修全体像

## イ eラーニングを活用した研修

### (ア) eラーニングについて

教員の資質向上が求められている中、県では、教員が子供と向き合う時間の確保のために研修の一部にeラーニングを取り入れた。eラーニングを活用した研修は、多くの企業でも取り入れられている。一般論として、受講生が学習する時間や場所を選ぶことができたり、繰り返し学習できたりする等の利点がある反面、受講生のモチベーションの維持が難しいことや学習効果の高いコンテンツを作成する必要があるなどの課題もある。

eラーニングでのよいコンテンツは、一般的に次のような特徴がある。

- ・適切な視聴時間である。
- ・画像データ（静止画・動画）やグラフを入れる等、見せ方の工夫がある。
- ・受講生が思考する場面を取り入れる等、理解を深める工夫がある。

### (イ) 令和元年度のeラーニングを活用した研修について

eラーニングは様々な形があるが、令和元年度は、初任者研修15回の校外研修のうち、1回分の4講座（表1）をeラーニングによる研修にして、学校で受講できるようにした。

#### ・コンテンツについて

今年度については、県教育庁各課担当が作成したプレゼンテーション資料をもとに、ソフトを使って作成した。画面にプレゼンテーション資料が映され、音声はテキストを自動的に読み上げる。読み上げているテキストを字幕で表示し、該当部分の色が変化する。今年度の実施にあたっては、上記の一般的によりコンテンツの特徴を加味して、作成している。

表1 コンテンツの内容

| 主題名                                     | 視聴時間                            | スライド枚数                     | 概要                                                                                                  |
|-----------------------------------------|---------------------------------|----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 児童生徒が成長するキャリア教育の基本的な考え方                 | 18分8秒                           | 16枚                        | キャリア教育の基本的な考え方や、各校種ごとの実践の在り方を説明している。また、令和2年度から導入される「キャリアパスポート」の活用方法を示している。                          |
| グローバルな視点を持つ児童生徒を育てるために<br>～E S Dの取組を含む～ | 34分15秒                          | 46枚                        | 千葉県の国際理解教育や文科省の外国語教育推進事業の取組を紹介するとともに、E S D（持続可能な開発のための教育）について説明している。条件分岐のフローチャートで、受講生の回答によって内容が変わる。 |
| 子供たちの人権と教職員の役割（虐待・生活困窮・L G B Tを含む）      | (前半)<br>22分7秒<br>(後半)<br>30分15秒 | (前半)<br>18枚<br>(後半)<br>24枚 | 学校人権教育推進のために教職員が果たす役割や、様々な人権問題やいじめ、児童虐待、障害者差別、性的マイノリティ等への対応について説明している。                              |
| 東京オリンピック・パラリンピックに向けての千葉県の取組について         | 14分35秒                          | 20枚                        | 千葉県で実施されるオリンピック・パラリンピックの開催競技・会場を紹介している。また、千葉県の「おもてなしCHIBA プロジェクト」にも触れ、大会の機運を高める取組について理解を図っている。      |

#### ・事後研修について

eラーニングで得られた新たな知識をもとに日常の教育活動の中で生かすことが大切である。今年度は、次のように事後研修を実施した。

- ① eラーニングの研修内容をまとめ、レポートを提出する。
- ② eラーニングで学んだ内容をもとに日常の教育活動の中で実践する。
- ③ 実践した内容をレポートにまとめて持ち寄り、初任者研修の校種別研修で協議



をし、振り返る。

#### (ウ) 受講生へのアンケート調査の実施

令和元年度のeラーニングを活用しての研修の受講生である初任者研修受講者にアンケートを実施した。

- ・実施期間 令和元年度9月19日～10月11日
  - ・回答方法 本センターwebサイトのあいすコミュニティ上で回答
  - ・回答数 945人（小学校籍400人、中学校籍181人、高等学校籍197人、特別支援学校籍167人）
- 【アンケート結果の主な項目】

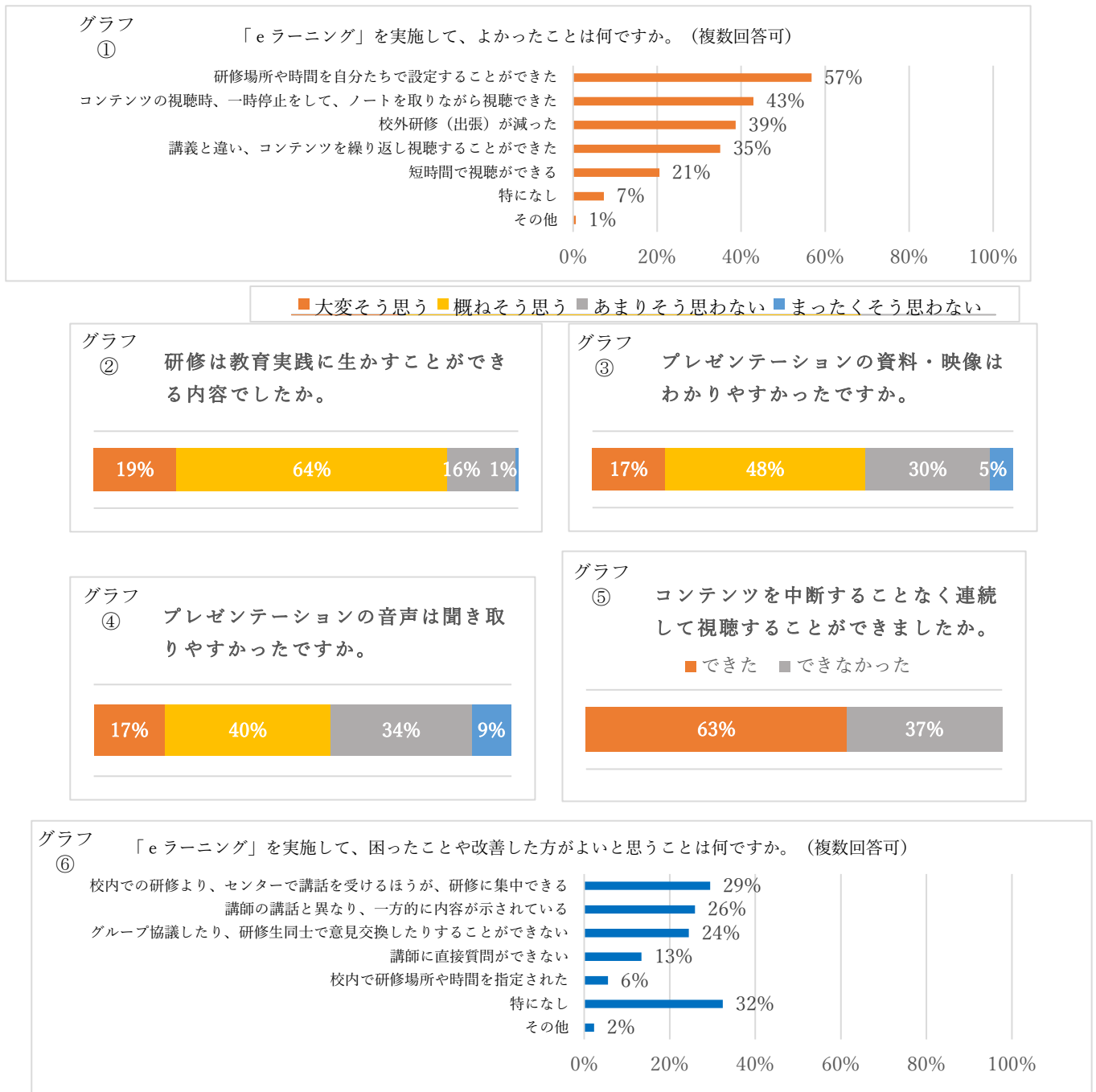


図10 eラーニングに関するアンケートの結果

### 【考察及び改善の方策】

グラフ①から、「研修場所や時間を設定することができた。」と回答した受講生が57%いた。時間や場所の制約を受けない利点が評価された。また、「校外研修（出張）が減った」と回答した受講生が39%おり、働き方改革が求められる中、子供と向き合う時間の確保を目的とした業務改善に、eラーニングは有効であったと考えられる。次に、「コンテンツの視聴時、一時停止をして、ノートを取りながら視聴できた」と回答した受講生が43%で、「講義と違い、コンテンツを繰り返し視聴することができる」と回答した受講生が35%いた。受講生が、eラーニングの利点を生かし、積極的に研修に参加していたことがうかがえる。

グラフ②から83%の受講生がeラーニングを活用した研修が、「教育実践に生かすことができる内容だった」と回答している。これは、研修内容や目的、形態等を考慮したことが高評価につながったと考えられる。

グラフ③からプレゼンテーションの資料・映像の肯定的回答は65%であった。また、グラフ④から音声の聞き取りやすさについて肯定的回答は57%であった。音声は、ソフトを使いアクセントや間を聞きやすいように調整しているが、今後も改善が必要である。

グラフ⑤から、視聴を中断した受講生が37%いた。都合に合わせて一時停止して視聴できることはeラーニングの利点であるが、同時に研修に集中できる環境を整えることが大切である。今年度と同様に、各学校へ受講の時間や場所の確保について今後も協力を依頼していく必要がある。

eラーニングは学校を離れずに自己の都合に合わせて研修を受けることができるという利点がある。しかし、困ったことや改善したほうがよい項目について調査したところグラフ⑥の結果となった。「意見交換ができない」「講師に直接質問できない」という回答があった。受講生もeラーニングの研修内容を深める場が必要であると考えている。このアンケート結果はeラーニング直後に実施したものであり、今年度の初任者研修においては、eラーニング後に教育実践及び協議を実施している。eラーニングをさらに効果的に活用していく上で、eラーニングに適した研修内容を精選するとともに、今後も事後の研修を設定する等工夫する必要がある。

## 6 今後に向けて

### (1) 校内研究の進め方

今年度末に、校内研究モデルプランの暫定版を本センターのwebサイト上からダウンロードができるようにする。令和2年度には、そのモデルプランをもとに、実証校で校内研究を実践し、検証・改善を行い、研究の成果を校内研究ガイドブックにまとめる。令和2年度末に県内の各学校及び関係教育機関等に校内研究ガイドブックを配付するとともに、ダウンロードができるようにする。

### (2) 新しい時代に対応した研修(新しい千葉県教職員研修体系に基づいた研修)の在り方

令和2年度の中堅教員等資質向上研修Ⅰで効果を検証し、改善の方向性を検討する。

eラーニングについては、今年度の調査研究をもとに、研修の実施方法やコンテンツについて改善を進めていく。さらに、課題を明らかにし、eラーニングを活用した効果的な研修について検討する。